



急速輸液装置 SL One[®] 開発の経緯と活用法 ～これまでの急速輸液の問題点と今後

How to use rapid infuser SL One ~ History of development and the beyond

演者

野崎徳洲会病院副院長
麻酔科部長

武富 太郎 先生

経験を積んだ麻酔科医であれば、不測の大量出血や生命を脅かす危機的大出血症例を経験したことのない者はいないでしょう。私の場合はまだ駆け出しのころ、手術中に不測の危機的大出血に遭遇し、残念ながら患者を失うという経験をしました。

当時の上司の「患者を失ったこの経験を決して忘れずに精進なさい」という言葉を胸に、私はこれまで研鑽を積んできました。あの日の出来事はそれから何日も私の頭から離れませんでした。今思えばあの辛い経験と上司の指導を忘れなかったからこそ、私が麻酔科医として一皮むけることができたと思っています。

それからの私は、全ての点が線で結ばれていくような奇妙なキャリアを歩むことになるのですが、そのあたりの話を「掴み」として交えながら、今回アイ・エム・アイ株式会社より上市された急速輸液装置 SL One[®]の上手な使い方、そして止血まで意識した大量出血のマネジメントについても述べたいと思います。

SL One[®]は、経済産業省(METI)の当時の課題解決型医療機器開発助成事業の一つとして開発資金の補助を頂き、私と株式会社メテックとで長い年月をかけて作り上げた機器です。

これまで本邦では、大量出血には空気混入リスクが排除できないローラーポンプや加圧式の輸液装置、またはポンピングによる輸液・輸血で対応せざるをえませんでした。

周知のとおり従来の方法ではその速度や加温性能が不十分であり、また使用時の空気混入による死亡事故が多発し、その経緯もあって2007年に「危機的大量出血のガイドライン」が策定されたことはまだ記憶に新しいでしょう。

SL One[®]の使い方を皆さんにお伝えし、「ボリューム管理を手中に収めて」もらって、危機的出血で命を落とす患者様をなくすことが私の麻酔科医としての使命だと思っています。